

## 中国語を母語とする日本語学習者がパーソナルコンピューターで 作文を執筆する際の外部リソースの使用実態 —中級・上級学習者を対象として—

石毛順子

### 要旨

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者が PC で日本語の作文を書く場合、どのような外部リソースを使用しているのか、またどのような外部リソースが適しているのか、日本語レベル別に明らかにすることである。中級学習者の外部リソースを用いる目的の多くは「漢字・漢語の読みを調べる」であり、その外部リソースはグーグル翻訳、Rikaikun、中日/日中辞書などであった。さらに「想起した中国語を日本語に翻訳する」目的にもグーグル翻訳、中日/日中辞書などが用いられていた。中級学習者に対しては、例文や品詞が示される外部リソースを用いる必要性が示された。上級学習者の使用目的は自分の想起した語彙の意味をより正確に理解し使用するということであり、国語辞典、類義語辞典、英日辞典などが使用されていた。語彙の意味をより正確に理解し使用するため、中級で行われていたものの活用できていなかった「自分の書いた日本語の文の一部をインターネットの検索窓に入力し、使用例を確認する」ことを上級には提案した。

### キーワード

パーソナルコンピューター (PC)、外部リソース、作文過程、中国語母語話者、中級・上級

### 1. 本研究の位置づけと目的

筆者はこの 10 年ほど中上級（以下上級に含める）と上級の日本語学習者の作文の授業を担当してきたが、5 年以上前から作文課題を課すと、全員の学生がパーソナルコンピューター（以下 PC）で書いた作文を提出するようになった（手書きするのか、PC で書くのかは学生の選択による）。石毛（2016）でも、中級と上級の PC と手書きでの作文過程の違いが取り上げられており、「外部リソースの助け」という項目が中級・上級ともに共通して PC で書いた場合に多く見られていた。「外部リソースの助け」は石毛（2012）によると「辞書や携帯を使う、テーマの書いてある紙を見て漢字を確認する」、石毛（2016）によると「辞書（冊子・アプリ・インターネットを含む）や携帯の変換機能を使う、テーマの書いてある紙を見て漢字を確認する」と定義されている。作文中の発音<sup>(1)</sup>と表記方法の変化を調査した石毛（2015）では、中級の中国語母語話者が、グーグル翻訳で漢字の読み方のみを調べたり、Rikaikun<sup>(2)</sup>というアプリを用いて読み方を調べたりすることが観察されていた。この理由を石毛（2015）は、手書きの場合は想起した漢語や漢字の形が日本語と同じであれば、発音やひらがなでの表記を正しく覚えていなくても漢字で書けるが、PC の場合は発音・表記を正しく覚えていなければ入力して変換することができないためであろうと述べていた。

確かに、「手書きをしながら辞書を引く」という活動より、同一の PC で作文を書きながら、インターネットの辞書やアプリなどを用いることは手軽であり、石毛 (2016) のように手書きより多く見られるということも納得できる。手書きの場合と比較して学習者は作文過程で様々な外部リソースを用いるようになったと予測される。

しかし、石毛 (2015) は発音と表記の変化に特化した研究であるため、主な外部リソースの使用は漢字の読みを調べる記述に留まっており、他の外部リソースの種類や、また外部リソースを用いる際の注意点については述べられていない。手書きで作文を書くことは授業内で行われることもあるため、外部リソースの使用時にどのような困難があるのか、教師が見つけた援助したり、あるいは他の学生にも使わせたい便利な使用方法を見つけて共有したりすることもできる。しかし、授業内で学生が PC で作文を書くことを見る機会は少ないだろう。また、辞書の使用は作文過程のみに限らないが、かつては学習者からどのような (冊子体の) 辞書を買えばいいのかと聞かれることが頻繁にあったが、現在はほぼなくなった。以上のことから、学習者の外部リソースの使用状況を観察したり、教師が望ましいと考える外部リソースを提案したりする機会が少なくなったといえる。そこで本研究では、学習者が外部リソースを用いる場面を観察し、石毛 (2015、2016) を踏まえうえて、レベル別の効果的な外部リソースの使用方法を提案したい。

## 2. 方法

以下、調査方法は石毛 (2016) の PC 群とほぼ同様であるが、2.4 で後述するように、本研究は外部リソースの使用方法を抽出してカテゴリー化を行った。

### 2.1 調査期間、実施場所、参加者

調査期間は 2012 年 7 月～2013 年 6 月であり、調査者の研究室で調査は行われた。参加者は中国語を母語とする中級<sup>(3)</sup>学習者 5 名、上級<sup>(4)</sup>学習者 5 名、計 10 名であった。

### 2.2 作文のテーマ

参加者は「大家族と小家族」「男と女」「車と自転車」「田舎の生活と都会の生活」「高校生活と大学生活」「台湾の家と日本の家」(または「中国の家と日本の家」)「台湾の食べ物と日本の食べ物」(または「中国の食べ物と日本の食べ物」)の中から 1 つのテーマを選択し、作文を書いた。

### 2.3 手続き

参加者募集の時点で、辞書や教科書など、作文を書く際必要なものの持ち込みや使用は全て許可していた。なお、PC は調査者の研究室のデスクトップ PC を使用した。

調査当日、「日本語学習者が作文過程で考えていることや行動を知る」という調査目的を説明し、考えていることを可能な限り口に出すよう依頼した。日本語の作文過程でも内言は日本語とは限らないため、母語での発話も許可した。参加者のうち 5 名が調査者との面識がほぼなかったことから、調査目的の説明後、自己紹介や雑談を行った。これは、参加者が発話思考法をしやすくするための条件として、調査者の自己紹介や雑談などの課題に集中しやすい環境づくりが高橋 (1993) で述べられているためである。

PCでの作文過程で通常用いている外部リソースやもの（紙や鉛筆等）を回答用紙に記入してもらい、それらがPCを使用するものなら、調査者のPCで正しく動作するか確認してもらった。例えば、インターネットの辞書なら、その辞書サイトに接続できるかどうか、アプリケーションなら、インストールして正しく動作するか確認してもらった。

その後約1時間、繰り返り上がりの必要な計算、母語での作文、日本語での作文の順で考えていることを口に出す練習をした。調査者は参加者に、練習中・調査中に参加者が黙ってしまった時は「話してください」と書いたカードで指示すると伝えた。考えていることを口に出すということは普段の作文過程ではしていないと思われたため、まず考えていることを口に出していることも予測される、繰り返り上がりの必要な計算より練習を開始した。練習時、作文過程で使用すると回答した以外の外部リソースやものを使用した場合は、先述の回答用紙に記入してもらい、それらも動作確認を行った。

練習（参加者によってはさらに新しい外部リソースやものの再確認の）後に、本研究で分析を行う作文過程の記録を行った。作文のテーマは記録開始直後に提示した。作文過程においてPCのモニターはモニターを録画するソフトで録画し、参加者の行動はビデオカメラで撮影し、同時にICレコーダーで録音した。それぞれの外部リソースの使用意図を作文執筆後に尋ねた。

#### 2.4 作文の所要時間、文字数

参加者10名の作文の所要時間、文字数は表1のとおりであった。

表1 参加者の作文の所要時間、文字数

	レベル	所要時間	文字数
1	中級	19分20秒	306字
2	中級	67分57秒	847字
3	中級	57分20秒	574字
4	中級	22分22秒	560字
5	中級	46分51秒	322字
6	上級	27分33秒	437字
7	上級	30分11秒	538字
8	上級	26分01秒	419字
9	上級	17分45秒	508字
10	上級	20分03秒	439字

#### 2.5 分析方法

分析資料とするために、録画ソフトデータ、ビデオデータ、録音データをもとに発話プロトコルを作成した。発話プロトコルの文字起こしは日本語部分を調査者が行い、母語部分をそれぞれの母語話者が行った。母語部分は日本語が堪能で、中国語を母語とする大学院生が翻訳した。分析資料として、この発話プロトコルと参加者の書いた作文とメモ、録

画ソフトデータ、ビデオデータを用い、参加者が外部リソースを使用している部分をピックアップした。そして、カテゴリー化を行った(カテゴリーは3章で後述)。

### 3. 結果と考察

本研究と先行研究(石毛 2015)で共通に見られた外部リソースの使用と、本研究で明らかになった外部リソースの使用を表2に示す。

表2 本研究と先行研究(石毛 2015)で共通に見られた外部リソースの使用と、  
本研究で明らかになった外部リソースの使用

	カテゴリー	事例	備考・実際の手順など
1	Rikaikun の使用	拡張機能 Rikaikun をインストールした Google chrome を用いて漢語や漢字の読みを調べる	
2		Rikaikun を用い1つの単語の読みを調べてみたところ、2つの単語に分割して読まれ、分割された単語の意味を読んでその単語を利用する	辞書の検索窓に「個體性」「個体性」「獨特性」と順に入力しそれぞれ中日辞書で検索するが、対応する日本語を見つけることができなかった。そこで「獨特性 日文」とインターネットの検索窓に入力するが、辞書が見つからず、カーソルを合わせてみたところ、Rikaikun で「獨特性」の「特性」の読みと意味がわかり、それを作文に使った。
3	グーグル翻訳の使用	想起した日本語(専門)に相当する英語(major)をグーグル翻訳に英語を入力し、日本語に翻訳し(専攻など)、その日本語の読み方を調べる	グーグル翻訳 <sup>(5)</sup> は単語・表現入力画面および翻訳結果画面の下にローマ字で読み方が表示され、またある言語が指定されている入力画面に異なる言語を入力しても、自動的に言語を認識する機能がある(例えば、入力画面を「英語」と指定していても、日本語の漢字を入力すれば、「原文の言語:日本語」と表示され、日本語と認識する)。
4		グーグル翻訳の中国語入力画面に中国語の単語・表現を入力し日本語に翻訳する	
5		グーグル翻訳に英語入力画面に単語・	おおむね4で日本語の訳語が見つ

		表現を入力し日本語に翻訳する	からないとき、4 の次の方法として5を用いていた。
6		グーグル翻訳に中国語入力方式で日本語入力画面に入力し、翻訳された日本語の読み方を調べる	
7		グーグル翻訳に中国語入力方式で英語入力画面に入力し、翻訳された日本語の読み方を調べる	
8	インターネットの検索窓の使用	インターネットの検索窓に「XXX（調べたい中国語） 日文」と入力し、辞書サイトや解説サイトを探す	
9		インターネットの検索窓に「XXX（調べたい英語） 日文」と入力し、辞書サイトや解説サイトを探す	
10		インターネットの検索窓に読み方を調べたい日本語の単語を入力し、読み方が書かれているサイトを探す	
11		自分の書いた日本語の文の一部をインターネットの検索窓に入力し、使用例を確認する	
12		インターネットの検索窓に調べたい日本語を入力し、違いが書かれているサイトを探し、例文を見て確認する	「見える」と「見られる」のどちらが自分の文に適切か解説されているサイトを見つけ、例文を見て自分の作文を「田舎に住んでいるなら、大自然などきれいな景色がたくさん見られるので」とした。
13	インターネットの辞書の使用	インターネットの中日辞書に中国語を入力し、日本語の単語や例を調べる	
14		インターネットの日中辞書に日本語を入力し、中国語で意味を確認する	
15		インターネットの日中辞書に中国語入力方法で日本語の漢字を入力し、読み方を確認する	
16		インターネットの中日辞書に調べたい単語を入力し、読み方を調べる	
17		インターネットの類義語辞典を使用する	
18		インターネットの英和辞典を使用し、日本語の単語を検索する	

19		インターネットの和英辞典を使用し、英語の単語を検索する	
20		国語辞典（wikipedia なども含む）で日本語の単語の意味を確認する	
21		英和辞典で日本語の単語の読みを調べる	
22	iPad の辞書の使用	iPad の英和辞書を用い、単語を調べた上で読み方も確認する	
23	教科書の使用	教科書を使用し、文法事項の検索と例文の確認を行う	
24		教科書を使用し、漢字の読みを調べる	

表 2 において、「インターネットの辞書の使用」にグーグル翻訳と Rikaikun を含めなかったのは、グーグル翻訳と Rikaikun はともに使用例や例文が載っていないためである。また、グーグル翻訳の場合は品詞も表示されないためである。

### 3.1 中級学習者

本研究と先行研究（石毛 2015）で共通に見られた外部リソースの使用方法は表 2 の 1, 3, 16 であった。

本研究で新たに見られた外部リソースの使用方法は、表 2 の 2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 19, 22, 23, 24 であった。漢字・漢語の読み方を調べるといった目的の行動が 1, 2, 3, 6, 7, 10, 15, 16, 22, 24 のように様々な方法で見られた。なかでも 1 の Rikaikun の使用がよく見られたため、1 名の参加者に作文完成直後に尋ねたところ、Rikaikun は読みの確認のみに使われ、2 のように意味を参考にすることは少ないということだった。

有効に活用されていた方法を見てみると、13 の方法で「同等」を中日辞書で検索し、「男女を平等に同等に扱う」という例文を見て「女男を同等に扱います」というように例文を利用して文を書いた参加者がいた。23 の方法を用いた参加者は、in the another hand を接続詞として作文中に用いることを思いついたが、教科書の例文を読むことで、「～一方で」は一層かたい文で用いられるということに気付き、最終的に「～一方で」を削除し、「こんないいところがありますが、田舎はやっぱり不便です。」という文にした。13, 23 を見ると、例文が書かれていることが中級学習者の文作成に大きな助けとなっていると思われる。

有効に活用できていなかった方法を見てみると、まず 17, 18, 19 の方法が挙げられる。ある参加者による 17, 18, 19 が含まれる実際の約 2 分の発話と行動は以下のとおりである。

( ) 内は参加者の行動と行動による結果、【】内は直前の中国語の翻訳である。

(グーグルを開き、検索窓に第一選択と入力する) 第一選択【一番の選択】うーん、(第一を消し、「最佳選擇【最善の選択】 日文【日本語】」で検索をする)(検索結果画面を見ながら) first choice, うーん、(first choice 日文【日本語】と入力する。検索結果

を見る。「日文」を消し、検索窓に候補として表示された「意味」に変える。weblio 英和辞典を開き、First choice の訳語として「一次選択」が出てくる) いち、いちじ、コピー (一次選択をコピーし、グーグル検索窓に入力する。検索結果画面をスクロールさせて見ていく) うーん、是這個嗎?【これなのかな?】 感覺好奇怪【なんか変】 一次選択 (weblio 和英辞典を開く) いち、せん、第一次【第一回】選択、(weblio 日中辞典に切り替える。一次選択が出てこないのので類義語辞典に切り替える。ここでも一次選択は見出し語としては載っておらず、Web を閉じる)

11 も、その方法を用いたある参加者は有効に活用することができなかった。作文に「つまらなくなると思っています」と書いていたが、word の機能により赤波線が「になると」に表示された。そこで、「なると思っています」をグーグル検索窓に入力し、検索結果を見た。「休みがちになると思っています」(接尾辞との接続)、「良くなると思っています」(形容詞との接続)を両方見つけているが、「つまらなくなると思っています」と修正することはなかった。

以上のように、中級では多くの外部リソースの種類が見られたが、レベルにより、外部リソースの使用方法は異なるのかを検討する必要がある。よって、上級学習者の使用方法を次節に挙げる。

### 3.2 上級学習者

上級で見られた外部リソースは表2の17, 18, 20, 21の4種類のみであり、石毛(2015)と共通に見られたものはなかった。中級と共通に見られたのは17と18であった。

17は中級では適切に使用できていなかったが、上級では「ちょっと」を、類義語辞典を用いて「多少」と言い換えるような適切な使用例が見られた。

また、中日/日中辞典が全く使われず、18のように英和辞典が使われていたことから、作文完成直後に理由を尋ねた。ある参加者によると、辞書によっては日本語の漢語に対する解説に、表記は同じでも意味が異なる中国語の漢語が記載されていて正確性に欠ける場合があったり、中国語の単語が同じ表記で日本語では違う意味で使われている場合があったり、例文が英日/日英辞典のほうが豊富であったりするため、より正確性を求める場合に英語を経由する場合もあるということであった。確かに、中級の中国語母語話者で「大部分」の意味を理解しており、その単語を作文で使用したいのに読み方がわからなかったため、グーグル翻訳を開き、中国語入力画面に「大部分」と入力したところ、日本語の翻訳結果は「最も」「ほとんどの」「一番」「最も多く」「ほとんど」であったという例も見られた。

上級のみで見られたのは20と21であった。20は「17 類義語辞典の使用」が適切に行われたのと同様に、上級になり日本語の運用能力が高くなったため、日本語のみで書かれた解説を理解できるようになったため、見られるようになったと思われる。

21は「追求する」を作文に書きたいものの「すいきゅう」「すいきょう」などと入力してしまっても変換できないため、英和辞典にpursueを入力して「追及する」の読みを調べたり、「分配する」を作文に書きたいものの「ふ」「ぶんはい」と入力してしまっても変換できないためにdistributeを英和辞典に入力して調べたりする例が見られた。

以上のように、中級では 22 種類の外部リソースの使用方法が見られていたが、上級では 4 種類のみであった。また、中級では主な外部リソースの使用の目的は漢字の読み方の確認 (1, 2, 3, 6, 7, 10, 15, 16, 22, 24) であったが、上級でその目的で用いられたのは 21 のみであった。

#### 4. 本研究のまとめと提案

中国語を母語とする中級日本語学習者の外部リソースを用いる目的の多くは「漢字・漢語の読みを調べる」であり、そのリソースはグーグル翻訳、Rikaikun、中日/日中辞書などであった。さらに「想起した中国語を日本語に翻訳する」目的にもグーグル翻訳、中日/日中辞書などが用いられていた。

語彙の接続方法や使用例を十分理解した上で、読み方のみを調べるなら、例文が表示されないグーグル翻訳の使用も問題がないと思われる。しかし例文や品詞が表示されないということを考えると、「インターネットで検索する」という同じような手順を踏むなら、中日/日中辞書などを用いたほうがよいと思われた。それは、Rikaikun とグーグル翻訳のみを使用した参加者の文では、グーグル翻訳を使用して「充實」を「充実した」と翻訳したものの、「その時から、私の大学生活がもっと充実になりました。」という例が見られ、例文がないために語彙を誤った方法で使用してしまうことがあったからである。さらに「13. インターネットの日中辞書に日本語を入力し、中国語で意味を確認する」において自分の作文にいかせる例文を見つけることができた例が見られたことも理由である。したがって、中級では例文の表示されない外部リソースも用いられているものの、例文の表示される外部リソースを用いるとよいと思われる。

一方、上級学習者の外部リソースを用いる目的は、中級とは異なり読み方を調べる事が中心ではなく、国語辞典、類義語辞典、英日辞典の使用などによって、自分の想起した語彙の意味をより正確に理解し使用するという事であった。

「11. 自分の書いた日本語の文の一部をインターネットの検索窓に入力し、使用例を確認する」は中級で 1 例のみ見られ、その参加者は有効に活用することができていなかったが、上級では多くの使用例を見ることを、使用例の確認のために有効に活用できるのではなかろうか。筆者は上級の作文の授業でグーグルの検索窓に日本語の単語の語幹までを入力し、使用例を見る方法を勧めている<sup>(6)</sup> (例えば、「意志を強める」というコロケーションが正しいのか確認したい場合、「意志を 強め」と入力することである)。入力を語幹までに留めることにより、「意志を強めて」、「意志を強めた XX」など、数多くの使用例を見つけることができるためである。したがって、上級では例文の表示される辞書以外にも、より多くの使用例にあたれる外部リソースを用いるとよいと思われる。

以上のように、レベル別に外部リソースや外部リソースの使用目的が異なることが明らかとなったが、本研究は中国語母語話者を対象としたため、特に中級に「漢字・漢語の読み方を調べる」ということが多く見られたとも考えられる。したがって他の言語を母語とする学習者でも、調査が必要と思われる。

(石毛順子いしげじゅんこ・国際教養大学・ishige@aiu.ac.jp)



## 注

1. 石毛 (2016) でも自分の思考の道具として用いられている心の言葉である内言 (ヴィゴツキー2001) を口に出すという発話思考法が用いられていた。
2. Rikaikun は Google chrome アプリケーションの 1 つである。Google chrome にインストールしておけば、Google の検索窓に、ある漢語を辞書や中国語方式で入力しても、カーソルを合わせれば日本語での読み仮名や意味 (英語) がふきだしで表示される。
3. 主教材として『中級の日本語 改訂版』(三浦・マグロイン 2008) を用いるクラスに所属している学生を「中級」とした。
4. 主教材として『日本語中級 J501—中級から上級へ』(土岐・平高・石沢・関・新内 2001) の後半を用いるクラスに所属している学生、および『日本の論点 2011』(文藝春秋 2010) または『日本の論点 2012』(文藝春秋 2011) を用いるクラスに所属している学生を「上級」とした。さらに、登録はしなかったが、プレースメントテストの成績により『日本の論点 2011』(文藝春秋 2010) を使用するクラスに登録する許可を得ていた学生を「上級」とした。
5. 本研究は 2012 年 7 月～2013 年 6 月に調査を行っているため、グーグル翻訳やインターネットの辞書の検索結果は、2017 年 2 月現在のものとは異なるものもある。
6. 上級の参加者は筆者の授業を受講している者がほとんどであったが、当時筆者はこの方法を授業で紹介していなかった。

## 付記

本研究は JSPS 科研費 24720237 の助成を受けている。

## 参考文献

- 石毛順子 (2012) 『第二言語習得における作文教育の意義と特殊性』 風間書房
- 石毛順子 (2015) 「中国語を母語とする中級日本語学習者のパーソナルコンピューターを用いた作文過程で見られる発音と表記方法の変化」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』7, 18-24.
- 石毛順子 (2016) 「中国語を母語とする日本語学習者におけるパーソナルコンピューターでの作文過程—手書きによる作文過程との比較から—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, 19-27.
- 高橋秀明 (1993) 「プロトコルからわかること、わからないこと」, 海保博之・原田悦子 (編) 『プロトコル分析入門』3 章, 新曜社, 58-76.
- 土岐哲・平高史也・石沢弘子・関正昭・新内康子 (2001) 『日本語中級 J501—中級から上級へ』スリーエーネットワーク
- ヴィゴツキー, L. (著), 柴田義松 (訳) (2001) 『思考と言語』新読書社
- 文藝春秋 (2010) 『日本の論点 2011』文藝春秋
- 文藝春秋 (2011) 『日本の論点 2012』文藝春秋
- 三浦昭・マグロイン花岡直美 (2008) 『中級の日本語 改訂版』ジャパントイズム